

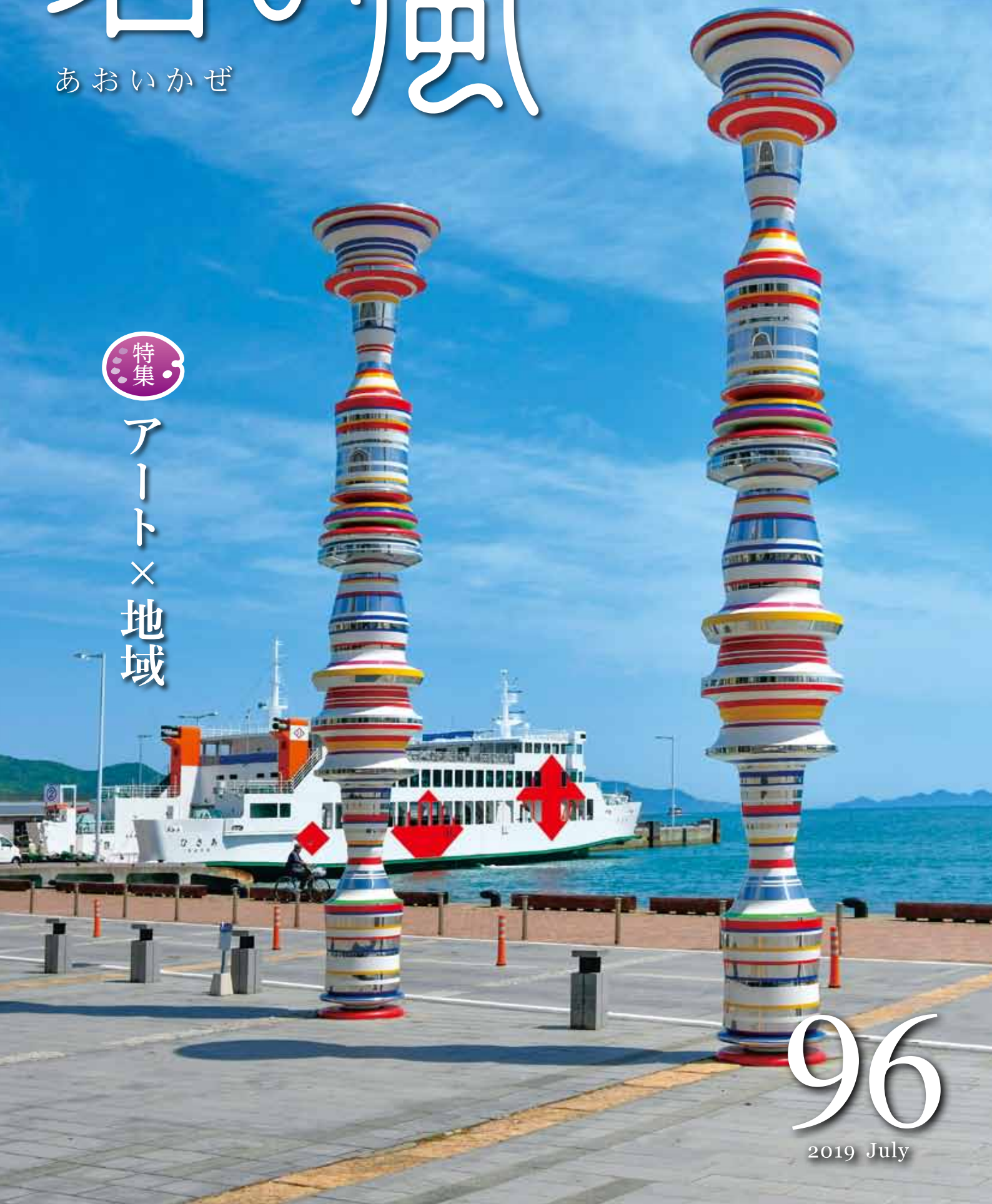
# 琥珀い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

アート×地域



96

2019 July

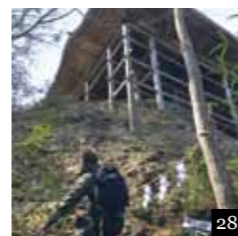
青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

きらめきの地域デザイン  
**碧い風**  
あおいかぜ

96  
2019 July

contents

- 3 **視点** アートが人を巻き込み地域のつながりを育む 瀬戸内国際芸術祭総合ディレクター 北川 フラム
- 6 温泉宿で現代アートを展示し地域の新しい魅力を創出 美作三湯芸術温度〈岡山県〉
- 8 アートの枠組みを広げ、地域や社会の実験の場をつくる 山口情報芸術センター〈山口市〉
- 10 地域資源の魅力をアートによって引き出す 広島市立大学〈広島市〉
- 12 文化芸術活動の裾野を広げ、協働の楽しさを体験する とりアート〈鳥取県〉
- 14 「地域に生きる企業家群像」96 アルファー食品株式会社 代表取締役 篠原 隆〈鳥根県出雲市〉
- 18 「キラリ輝く元気企業」69 地元の木を使い切り、林業振興と地域活性化を目指す株式会社オロチ〈鳥取県日南町〉
- 20 「夢紡人／ゆめつむぎびと」92 子どもたちが明日に希望を持てる社会の実現を目指す「子ども明日花プロジェクト」のリーダー児玉頼幸さん〈山口市〉
- 23 「この名酒にこの一品」19 酔心 氷わり原酒 タコの天ぷら〈広島県三原市〉
- 24 「近現代芸術再発見」12 重森 三玲〈岡山県生まれ〉「1896-1975」
- 26 「新連載」船上から見る景色 1 浦富海岸島めぐり遊覧船〈鳥取県岩美町〉
- 28 「山をあるく」7 三徳山〈鳥取県〉



●表紙写真：高松港にそびえ立つ2本の柱。一部は鏡面になっており、周囲の情景を映し出す。大巻伸嗣「Liminal Air -core-」  
表紙写真提供：阿部 章仁  
●目次写真提供：阿部 章仁、広島市立大学、鳥取県総合芸術文化祭実行委員会、古川 誠、山陰松島遊覧株式会社  
●デザイン：有限会社シフト

\*本誌は再生紙を使用しています。

特集  
アート×地域

視点  
アートが人を巻き込み  
地域のつながりを育む

瀬戸内国際芸術祭総合ディレクター 北川 フラム

**アートは本来、人間と文明の関係を表す技術**  
三年に一度の瀬戸内国際芸術祭が四月二十六日に開幕した。二〇一六（平成二十八）年の前回の芸術祭ではアジ

アでの人氣に火がつき、中国や香港、台湾から多くの人が瀬戸内の島々を訪れた。その熱は昨年頃から欧米にも伝わり始め、海外メディアもこぞって瀬戸内を取り上げている。旅行誌の「ナショナル・ジオグラフィック

ラベラー（英国版）」が推す「二〇一九年の最もクールな場所（THE COOL LIST 2019）」の一位に「Setouchi」が選ばれ、ニューヨークタイムズ紙の「二〇一九年に行くべき五十二カ所」でも「Setouchi Islands」が日本で唯一選出された。このように海外からも注目されるようになったのは、瀬戸内の海の魅力や、島を巡る旅の面白さだけでなく、現代アート自体の変化が背景にあるだろう。

これまでの現代アートは、ホワイトキューブと呼ばれる、ギャラリーや美術館の中の均質な空間で展示するように作られてきた。この空間でどんな表現ができるかをアーティストが追求していた結果、東京でもニューヨークでも同じように鑑賞できるアートが生まれていった。ホワイトキューブにおさまるアートは、売買しやすいためのオークションで高値で競り落とされていく。現代アートは、金融商品になってしまったのである。

しかし、アートは元来、人間の営みや自然、社会と密接に関係したものだ。人類最古の絵画といわれるアルタミラ洞窟やラスコー洞窟の壁画には、古代の人が大変な思いをしながら仕留めた馬や鹿などの動物の姿が、その毛や血を使って描かれている。そこには、



瀬戸内国際芸術祭の舞台となる島々

人間の営みの痕跡だけでなく、祈りの気持ちも込められている。ルネサンス期を含め、美術は人間と文明の関係を表すための技術だった。日本語ではこの技術に「美」という字を当ててしまったことで、アートは床の間に飾って眺めるものと解釈されてしまったが、本来は「Artificial」つまり「人間の手を使った」という意味なのである。

都市空間を飛び越え  
里山や離島をアートの舞台に

一九八〇年代頃から、現代アートの世界では、ホワイトキューブを飛び出し、街に出ようとするアーティストの動きが見られ始めた。ドイツを中心とした、公園や街に現代美術を展示する都市型芸術祭がその代表例といえる。





毎月お誕生会を開く「島キッチン」  
建築：安部良／豊島 photo：Osamu Nakamura



古い民宿に8つのお店をつかった「島の中の小さなお店」プロジェクト  
写真は原倫太郎+原游“ピンボン・シー”／女木島 写真撮影：阿部 章仁



宇野港周辺で採取したゴミや不用品を集めてつくったチヌ(クロダイ)  
淀川テクニク“宇野のチヌ”／宇野港  
photo：Osamu Nakamura

海外だけでなく、企業の関心も年々高くなってきている。メセナや社会貢献と掲げることなく、「面白いから」と社員をボランティアに参加させるIT企業も



瀬戸大橋でつながる5つの島で、漁師や島の人たちと漁網を編み、人や島の記憶をつないだ  
五十嵐靖晃“そらあみ(島巡り)”／沙弥島 写真撮影：阿部 章仁

考えたからだ。地元の女性たちによる地元食材の手料理が食べられる場所で、毎月「島のお誕生会」が開かれる。こえび隊と呼ばれる芸術祭のボランティアサポーターが、毎月丸四日をかけて、島内の約二百七十軒の家に誕生日会の案内のチラシを配り、誕生月の人に島キッチンに来てもらって、イベントを開催している。観光客も加わってこのお誕生会は定着した。

急速に近代化が進むアジアの国々は、百五十年かけて近代化を進めてきた日本に、非常に興味を持っている。日本をはるかに上回るスピードで都市化が進む彼らにとって、地域文化をどう残すかは喫緊の課題だ。特に、都市部と農村部の格差が激しい中国では関心が高く、二〇一八(平成三十)年には、五十を超える省、地、県、郷の首長が大地の芸術祭を訪れた。

profile

北川 フラム(きたがわ・ふらむ)  
1946年新潟県高田市(現・上越市)生まれ。東京芸術大学美術学部卒業。アートディレクター。(株)アートフロントギャラリー代表。これまで数々の芸術展を企画し、現在、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(2000年～)、「瀬戸内国際芸術祭」(2010年～)、「北アルプス国際芸術祭」(2017年)、「奥能登国際芸術祭」(2017年)で総合ディレクターを務める。2003年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ、2016年紫綬褒章、2017年朝日賞、2018年度文化功労者。

先祖代々が暮らしてきた土地に住むことの誇り

大地の芸術祭のディレクターを務めていた私に瀬戸内海で芸術祭を始めた

日本は海によって生きてきた国だ。日本の国土面積は世界で六十二番目の大きさだが、海岸線は六番目に長い。北前船をはじめ、海の交流によって、活気が生まれ、国が栄えてきた。

豊島は、一万二千年前から人が住んでいた形跡がある、名前の通りの豊かな島だ。壇山という原生林があり、そこから水が流れているため、備讃瀬戸の島では珍しく農業ができる。豊島では、田畑を復活させて自給自足を可能

アジアからの熱視線

前回の芸術祭では、延べ約七千人がボランティアサポーターとして活動した。驚くべきは、その活動のかなりの部分が、外国人のサポーターに支えられている点だ。瀬戸内国際芸術祭でボランティアに参加するには、宿泊費も渡航費もかかる。それでも、中国、香港、台湾、韓国などから多くの人が来てく

自立できないからこそみんなが関わる動機になる

アートは赤ちゃんみたいなものだ。とにかく手間がかかるし、周りの人も巻き込む。アートが自立できない存在であるからこそ、みんなが関わる動機になっている。この面白さは、芸術祭を始めてから分かったことだ。

島への旅は、新幹線や飛行機とは明らかに違う旅情がある。瀬戸内の島々を訪れたら、それぞれの島がかくも違うことに驚くはずだ。都市の均質空間とは違う、人間の五感が生きる場が島にはある。ぜひ多くの方に芸術祭に足を運んでほしい。

ところが、二〇〇〇(平成十二)年に始まった「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟県十日町市、津南町)や瀬戸内国際芸術祭では、都市空間をも飛び越え、もっと厳しい現実の中にある豪雪地の里山や離島を舞台にした。里山や離島は、環境問題の影響や資本主義の歪み(ゆがみ)が、顕著に現れている場所である。こうした場所

成十八)年だった。福武財団の福武総一郎さんが長い年月をかけて「ベネッセアートサイト直島」を育ててきたこと、また、香川県側に地域振興の一環で芸術祭を始めたいという機運があったことがきっかけとなった。

祭りのためにどんな準備をするのが重要

芸術祭の構想を持って豊島を訪れた十一年前、豊島は依然として風評被害に苦しめられており、産廃物不法投棄問題への対応をめぐり島は政治的に二分していた。私が芸術祭の話をする



豊島美術館 写真：森川 昇

二〇一〇年秋にオープンした豊島美術館は、その水をテーマにした唯一無二の美術館である。地元住民とともに再生した棚田の敷地の一角に、アーティストの内藤礼と建築家の西沢立衛は、傾斜によって流れる水滴を見るだけの、絵画も彫刻もない美術館をつくった。自然と建築、アートが見事に融和した美術館で、今や世界中から人が訪れる人気の美術館となった。

# 温泉宿で現代アートを展示し 地域の新しい魅力を創出

みまさかさん とう  
美作三湯芸術温度 《岡山県》

湯郷温泉・湯原温泉・奥津温泉の宿で現代アートを展示するイベント「美作三湯芸術温度」。今年十月から開催が予定されている第二回美作三湯芸術温度二〇一九では温泉地の可能性を広げ、新たな客層を呼び込む機会として、さらなる発展が期待される。

## アートを通して 県北を盛り上げる

本州と瀬戸内海の島々をつなぐ玄関口となる岡山県では、三年に一度の瀬戸内国際芸術祭に合わせて、地域の魅力をアートの視点で掘り起こし、芸術祭の効果を県内全域に波及させようとするさまざまなアートイベントを開催している。その一つとして企画されたのが

「美作三湯芸術温度」である。

美作三湯とは、岡山県を代表する県の北の名湯、湯郷温泉・湯原温泉・奥津温泉を指す。古くから湯治場として親しまれてきたが、岡山市や倉敷市から離れているため、瀬戸内国際芸術祭に合わせて県北地域を訪れる人は多くはなかった。

一方、旅行形態が団体から個人へとシフトする中、全国の温泉地では、近年、温泉地のイメージを一新するような目新しいイベントが次々と行われるようになった。その中には、道後温泉の「道後



太田三郎「バードネット—世界はつながっている」／八景（湯原温泉）



日用品の洗濯バサミを用いて旅館のエントランスを非日常的な空間に。  
高本敦基「組み立て式の日常について考えてみる」／菊乃家旅館（湯原温泉）

ていることから、インスタレーションの中央にはうさぎのぬいぐるみを並べ、子どもが喜ぶような空間を作り上げた。知り合いの家に来たような、身も心もほっこりと温かくなる湯原温泉のおもてなしにも影響を受けたという。

## 今回は宿で泊まりたい という要望も

前回の開催期間で美作三湯芸術温度二〇一六を訪れた人は約十万五千人に上った。  
「当初の予想は三万〜四万人だったの

オンセナート」や別府温泉の「混浴温泉世界」など、温泉地で現代アートを展示するイベントもある。アートと温泉を組み合わせることで、県北地域の盛り上げにつなげられないか……。こうした思いから、美作三湯芸術温度は企画された。

## 温泉地の歴史や宿の印象から 生まれたアート作品

「当初は、『アートで地域を盛り上げるってどういうことですか』と構えていた温泉宿もありました」とキュレーター\*を務める奈義町現代美術館館長の岸本和明さんは振り返る。

「一番気をつけたのは、アートが商売の邪魔にならないようにすること。温泉宿と連絡を密に取りながら、宿と親和性が高そうな県内外のアーティストを声をあげました」  
初めての試みで多少の不安を感じていた温泉宿側からも好評で、制作した作品をイベント後もモニュメントとして飾り続けたという申し出もあったという。

## 同じ時代のアーティストの作品展 自由な環境で体験する楽しさ

美作三湯芸術温度のように、特定の場所に合わせて制作された作品や置かれた場所の特性を生かした作品は、サイトスペシフィック・アートと呼ばれる。なぜ今、サイトスペシフィック・アートを見るために、遠方まで足を延ばす人が増えているのか。その背景には鑑賞者と作品との関係性に変化があるのではないかと岸本さんは話す。

「名画と異なり、現代アートは同じ時代を共有するアーティストの作品です。今の時代を生きる者として思いを汲み取れることが鑑賞者にとっては面白いのではないのでしょうか。また、美術館での鑑賞はさまざまな制約があり、時に窮屈に感じられることもありますが、美術館の外では自由に話をしながら、作品に向き合えます。そうした開放的な環境も人の気持ちに刺激を与えているように思います」

作品が場所と調和するためには、場所の特性をアーティストが自分なりに



松岡徹「はんざきさん湯上がり姿」／元禄旅館 油屋（湯原温泉）

に声をかけていきました」

第一回的美作三湯芸術温度二〇一六では、二十二軒の宿に十六名のアーティストが作品を展示した。温泉地の歴史や宿の印象から触発されて生まれた作品も多い。松岡徹さんは湯原温泉に通う中で、ハンザキ（オオサンショウウオ）の伝説や祭りがあることを知り、はんざきさん湯上がり姿」と題した彫刻を制作した。愛らしいハンザキの姿は宿泊客や来訪者の心を捉え、SNSで写真を共有する人が続出し、話題になった。太田三郎さんは、使用済み切手を絡ませた防鳥網を吊り下げるインスタレーション「バードネット—世界はつながっている」を旅館のロビーに設置。展示先の旅館「八景」は、ウサギをシンボルにし、赤ちゃんや小さな子どもの宿泊を手厚くサポートし

「美術館には学芸員がいますが、温泉宿となるとアーティスト自身が経営者や従業員のたちとコミュニケーションをとる必要が出てきます。空間の自由が利く分、自らの責任も重くなる。特に若手にとっては、自分の視野を広げる良い機会になると思います」

今年十月五日から来年一月十三日まで開催される第二回的美作三湯芸術温度二〇一九では、前回の反響を受け、規模を拡大し、二十六の宿で二十四人のアーティストが展示を行う予定だ。「岡山県は若手芸術家への顕彰制度が充実しており、新進気鋭の台頭も見られることから、第二回では県内の若手アーティストの起用を増やしました。奈義町現代美術館なども含め、今まで点で存在していた要素を線で結んで面にして、『アートを見に岡山県全域を巡る』という大きな流れを作りたいと思っています」



キュレーターを務める  
岸本和明さん



お湯は人の心身を癒やすだけでなく、神事にも使われることから、浄化をテーマに湯気からできた水滴を撮影し、作品にした。  
胡桃澤千晶「ウキエガタキモノタチヨ」／やさしさの宿 竹亭（湯郷温泉）

## アート×地域

# アートの枠組みを広げ、地域や社会の実験の場をつくる

## 山口情報芸術センター〈山口市〉

コンピュータや通信技術、映像などのメディア・テクノロジーを用いた新しい表現を探索する山口情報芸術センター。市民や専門家との協働を理念とし、ユニークな活動を展開し続けている。

### 地域に活力をもたらす情報産業のハブとして誕生

山口市中心部、中央公園に隣接して立つ山並み形の建物が、二〇〇三(平成十五)年にオープンした山口情報芸術センター(Yamaguchi Center for Arts and Media)通称YCAMだ。館内には劇場形式のスペース、ギャラリー、映画館などがあり、吹き抜けや廊下も含めた館内ほぼ全ての空間が展示・制作に利用できる。さらに山口市立中央図書館が併設され、常に人々

が行き交う複合文化施設として市民に親しまれている。

「開館から十五年が経過し、この間、インターネットやスマートフォンによってメディア・テクノロジーは急速に浸透しました。YCAMの取り組みも時代とともに認知されるようになり、通算来館者数は二〇一七(平成二十九)年に一千万人に達しました」とアーキビストの渡邊朋也さん。

YCAM誕生の背景には、一九八〇年代のニューメディアブームの到来があり、県都ではあるが人口・産業面で県内トップの座にない山口市で、高校跡地であった現YCAM

AM所在地の周辺を情報産業の集積地にするという構想が生まれた。その情報産業と市民をつなぐ拠点として、アートセンターを開設することになった。

### 研究開発や作品制作を担うYCAMインテラーラボ

YCAMは「ともにつくり、ともに学ぶ」ことを活動理念とし、作品の収集ではなく、メディア・テクノロジーを基礎とした研究開発(R&D)に力を注いでいる。活動の中心を担うのが、独自の研究開発チーム「YCAMインテラーラボ」だ。キュレーター、エデュケーター、エンジニアなどさまざまな能力を持った約三十人の内部スタッフが構成されている。

YCAMの活動には、「芸術表現」「教育」「コミュニティ」の三つの方向性がある。



ダンサー・梅田宏明氏の筋肉の動きや運動座標を光・音を操るためのデータへと変換し、ダンスと一体となった空間を作り出した「Holistic Strata」  
撮影：丸尾隆一(YCAM)



映画「ワイルドツアー」ではYCAMや山口市内で撮影を行った  
撮影：田邊アツシ



コロガル公園シリーズの一つ「コロガルガーデン」(2016年)。歩くと照明の色が変わったりと、仕掛けが満載の遊具  
撮影：山中慎太郎(Qsyumi!)



「スポーツハッカソン for Kids」でスマートフォンが埋め込まれたサーフボード形の「Yジャイロ」を揺らす子どもたち。ジャイロセンサーが傾きを計測している  
撮影：田邊アツシ



RADLOCALでのグループワーク  
撮影：董野孝幸

ラやマイク、プログラム可能な照明やサウンドシステムを埋め込んだ遊具で、振動に応じて照明が

光ったり、内蔵マイクに向かって叫んだ声が遠く離れた場所から聞こえたりと、見えない仕掛けが

協働し、映画「ワイルドツアー」を制作した。YCAMインテラーラボとワークショップを行いながら作品コンセプトの構想やシナリオ作りを進め、山口市で撮影を行った。

### 遊具や道具でメディア・テクノロジーを体感

「教育」分野の代表作が、グッドデザイン賞を受賞した「コロガル公園」シリーズである。波のようにうねった木製床に、金属管の通話装置の伝声管やカメ

ツハッカソン for Kids」は、その後、市内の多くの小学校で実施された。

### まちの未来を描くツール

「コミュニティ」の分野では、地域課題や公共空間の課題に対し、豊かな発想力で解決策が提案できるプロデューサーやプランナーを育てる人材育成プログラム「RADLOCAL」を実施してきた。二〇一六(平成二十八)年には、全国から参加者を募集し、四日間の集中ワークショップを開催した。

デザイン研究者や編集者、ソフトウェアエンジニアを講師に迎え、レクチャーやリサーチ、グループワークを行った後、最終日には、「五年後のセリングツールが日常的になった地域社会」をテーマに、各グループがプレゼンテーションを実施した。湯田温泉の路地に仕掛けた人感センサーの反応

からリアルタイムで混雑状況が発信される周遊観光マップなどのアイデアが出され、発表を見た人からは、「ぜひ実現してほしいアイデアがあった」といった声が上がったという。

### シビックプライドを育む存在に

「オリジナルのワークショップはメディア・テクノロジーの面白さをマンツーマンでしっかり伝える場であるのに対し、コロガル公園シリーズは、環境を通して、自ら感じ取ってもらう場。これからの社会に不可欠なセンスを養うには、両方のアプローチをとることが有効と考えています」

「YCAMの存在、あるいはそこから生み出されたコンテンツや経験が山口市民のシビックプライド(地元への愛着や誇り)につながるよう、活動の幅を広げていきたい」と渡邊さんは未来に思いを馳せる。そうした意識を地域で育んでいくのも、YCAMの使命であろう。

(文・村上郁子)

※1 アーキビスト… 文書館などで、資料の査定や収集、整理、保存、管理などに当たる専門職

※2 エデュケーター… 美術館や博物館で教育・普及活動を行う専門職

※3 センシング… センサーを利用して音・光・圧力・温度などを計測・判別する技術

## 地域資源の魅力を アートによって引き出す

### 広島市立大学 《広島市》

伝統工芸の技術の継承や、作品制作・展覧会によるにぎわいづくりなど、アートを通じた多様なプロジェクトを推進する広島市立大学。アートによって地域資源の新しい側面を引き出すとともに、住民とのつながりも深めている。

### 他大学や高専、地域や企業等 と協働して地域活性化に 取り組む

広島市立大学は、西日本では珍しい芸術学部のある公立大学で、二十年ほど前から地域をフィールドにアートを制作するプロジェクトを独自に行って



宮島ろくろ細工の制作の様子。技術の習得のほか、道具や材料の研究も行っている



宮島ろくろ細工に螺鈿(らでん・貝などを使った装飾技法)を埋め込んだ学生の漆作品

きた。

「大学の近くにギャラリーなどがあまりなかったため、学生が作品を発表できる機会を増やそうと、地域に飛び出していきました。依頼を受けて長崎県、島根県の玉造温泉、香川県の小豆島でも実施し、その後広島市内でもプロジェクトを行うようになりました」と、アートプロジェクトを統括する特任助教の三上賢治さんは話す。

二〇一五(平成二十七)年度からは、県内の七校(尾道市立大学・広島工業大学・広島国際大学・広島修道大学・広島商船高等専門学校

が始まった。

「大学でも県北地域で活動をしたいと思っていたときでした。彫刻や立体造形の材料となる木を無償で提供してくれるという住民の熱意もうれしかったです」

「大学でも県北地域で活動したいと思っていたときでした。彫刻や立体造形の材料となる木を無償で提供してくれるという住民の熱意もうれしかったです」

### 廃校を活用した芸術村で 学生が作品を制作

広島県北広島町筏津地区では、夏休みを利用して学生が筏津芸術村に滞在し、作品を制作する「筏津プロジェクト」が行われている。

筏津芸術村では、廃校になった小学校を、地元出身の陶芸家や木版画家らが制作拠点として活用し、一般市民向けに陶芸教室などが開かれている。筏



筏津芸術村の展覧会「年々歳歳筏津曼荼羅芸術祭(ねんねんさいさいいかにだづまんだらげいじゅつさい)」。学生は制作した作品の展示だけでなく、展覧会の企画や運営も行った



広島市立大学特任助教の三上賢治さん。自身も同大学で彫刻を専攻した

(文・藤沢亨乃)

くという。こうした思いの積み重ねが、地域に住む人々の心を豊かにしていくのではないだろうか。

### プロジェクトを通じ、 アートへの理解が深まる

さらに、展覧会ときには、COC+事業に企画する安田女子大学管理栄養学科と高齢者向けの食のイベントを共催した。

「食を切り口にしたイベントは、地域の人も参加しやすく、高齢者の方も喜んで足を運んでくれます。こうしたイベントを取り入れながら、アートイベントの敷居を低くすることも大切だと思っています」

「食を切り口にしたイベントは、地域の人も参加しやすく、高齢者の方も喜んで足を運んでくれます。こうしたイベントを取り入れながら、アートイベントの敷居を低くすることも大切だと思っています」

### 伝統工芸の技術を学生が継承

COC+事業の一つ、「宮島ものづくり産業復興プロジェクト」は初年度から始まった。江戸時代から続く伝統工芸である「宮島ろくろ細工」の技術を持つ伝統工芸士は現在、三人しかいない。三人とも高齢で後継者がいないため、伝統を継承しようと同大学の漆造形専攻の学生が技術を学んでいる。

二〇一九(令和元)年度は宮島で作品



宮島双六観光マップ。裏は英語表記。学生が自ら散策し、船から見た風景を描いている



山口県柳井市の柳井金魚ちょうちん祭りとのコラボレーション。学生制作のオリジナル金魚ちょうちんを飾り、一般客による人気投票が行われる

※1 COC+事業…地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)。COCは、Center of Communityの略

※2 宮島ろくろ細工…寛永年間に宮島にろくろ技術が伝わって生まれた、丸盆や茶托などの木工品。木目を目立たせた仕上げが特徴

## アート×地域

# 文化芸術活動の裾野を広げ、協働の楽しさを体験する

とりアート 《鳥取県》

国民文化祭をきっかけに生まれたとりアート。文化の創造でまちにぎわいをもたらし、地域活性化の道を開く契機として期待されている。

### 国民文化祭の成果を継承

とりアートの愛称で知られる鳥取県総合芸術文化祭は、県民自らを取り組む文化芸術の祭典として、二〇〇三（平成十五）年度から始まった。開始のきっかけとなったのは、その前年度に開催

された「第十七回国民文化祭・とっとり2002」だった。国民文化祭とは、歌や演奏、演劇、美術、民俗芸能などさまざまな文化活動に親しんでいる愛好家や団体が成果を発表する文化の祭典で、文化庁の主導により、一九八六（昭和六十一年）年に始まった。

国民文化祭・とっとり2002では、県内の各市町村を会場に、オーケストラや吹奏楽の演奏、能楽や日本舞踊の披露、茶道や華道の会など多様な事業やイベントが



2018年度のメイン事業「ハンゼルとグレーテル」本番公演

取シテイバレエ、合唱はこの公演のために編成した合唱団が担った。クリスマスイブの日に開かれた公演を訪れた人の中には、初めてオペラを体験した人も多く、「生のオーケストラ、音楽が良かった」「久しぶりに感動した」という声が上がったという。

事業としてミュージカルや演劇などの公演を行っている。企画の決定から公演まで三年がかりで進める事業だ。企画を公募した場合、採択団体の決定後、一〜二年目は台本の練り上げや作曲などに時間を費やし、三年目に舞台出演者の練習や舞台・衣装づくりを行う。基本的に出演者の多くは地元の人たちで、舞台監督や演出などはプロに依頼する。

二〇一八年度のメイン事業は、「ヘンゼルとグレーテル」のオペラ公演で、倉吉未来中心（鳥取県倉吉市）大ホールで開かれた。県内のソリスト（独唱者）が中心となって熱演し、演奏は地元のアザレア室内合奏団、バレエは鳥

変ですが、それだけに公演を終えたときの達成感は大いいです。普段は一緒に活動することのない他の団体と共演することもメイン事業の特徴です」と、井上さんは話す。

二〇一六（平成二十八）年度は、鳥取市在住のジャズピアニストの菊池ひみこさんがプロデューサーとなり、「鳥たちの音楽祭 [This is Jazz!]

開かれた。

「国民文化祭に向けて、県全体でジャンルごとに準備に取り組む中で、これとても良い機会だと非常に盛り上がりつつありました。一度きりで終わらせてしまうのは惜しいという声に参加者から上がり、文化振興に取り組む県の方針とも一致しており、終了後、国民文化祭の成果を継承するために、鳥取県の事業として鳥取県総合芸術文化祭が立ち上げられました」と、とりアート実行委員会副会長の井上拓也さんは振り返る。自身も、鳥取市交響楽団や鳥取県オーケストラ連盟の一員として、国民文化祭に参加した経験を持つ。

### 市民の芸術活動発表の場

とりアートの事業構想の柱の一つは、「文化芸術活動の裾野の拡大」である。とりアートでは、県内を東部・中部・西部に分けて、それぞれの地区

### 地域に根づかせるためには日頃の活動が重要

世界的なミュージシャンである菊池ひみこさんとギタリストの松本正嗣さん夫婦は、鳥取市に移住後、市内の日乃丸温泉の銭湯の二階にライブハウスをオープンした。鳥取にジャズを根付かせようと毎年ジャズフェスティバル「鳥取JAZZ」を開催している。「菊池さん夫婦のように日頃から活動している方々が、とりアートのプロデューサーになっていっている人と結びつけてくれたことで、文化芸術の輪が広がってきました。マグネットの役割を果たす人の存在が、とりアートが続いてきた一因だと思います」

### 芸術家と社会、行政をつなぐアートマネージャーの育成

多様な文化芸術活動を次世代に引き継いでいくため、とりアートでは人材育成を重視している。特に力を入れているのが、芸術家と社会（観客）、行政をつなぐアートマネージャーの



鳥取東高校書道部によるオープニングパフォーマンス

でテーマを定め、パフォーマンスやワークショップ、展示に参加する団体を募集する。二〇一八（平成三十）年度のとりアートでは、因幡麒麟獅子舞や書道パフォーマンス、ゴスペルやアデス音楽、民話語りなど、幅広いジャンルのグループがステージに立った。出演者は高校の部活動や伝統芸能の保存会、趣味のサークルなど形態や年齢層もさまざま。

「オーケストラのように人数が多い団体なら年に一回ホールを借りて演奏会を開催することもできますが、数十人規模の団体だと、ホールを借りるのも難しい。そうした人たちに発表の場を提供するのがとりアートの大きな目的の一つです。とりアートを通じて、鳥取県内にこれほど多くの活動団体があることも発見できました」

できるだけ多くの人の目に触れられるよう、ステージは公共施設や大型商業施設の広場などに設置している。さらに、パフォーマンスを見た人が次は自分も参加しようと思えるようなきっかけとなるよう工夫を重ねている。

### 地元住民とプロが協働するメイン事業

事業のもう一つの柱が、「文化芸術の頂点の伸長」である。毎年、メイン育成である。各地区でワークショップや研修などを開催し、アートマネージメントのノウハウを実践的に体得する機会を増やしている。

「アートマネージャーだけでなく、文化芸術活動に興味を持つ中学生や高校生を増やしていくことも重要です。子どもが減ると、部活動や団体の維持が難しくなります。アートの敷居を高くせずに、とにかく『楽しかった』と思ってもらえることの積み重ねが大切だと思います」



因幡麒麟獅子舞のステージ



音楽とダンスの体験型ワークショップ「森まりの森の中2018」



とりアート実行委員会副会長の井上拓也さん



# 誰でもおいしく食べられる商品を追求

アルファア食品株式会社 代表取締役

篠原 隆

〈島根県出雲市〉

## 被災者の心身を支える 米の非常食

近年、地震や集中豪雨による土砂崩れや洪水など大規模な災害が日本各地で多発している。こうした非常時に重宝されるのが、水を注ぐだけで食べることができ、腹持ちがいい米の保存食である。最近、災害に備え、自治体や学校、企業、病院、福祉施設だけでなく、一般家庭でも購入する機会が増えている。

こうした米の保存食や、短時間で調理可能な赤飯やおこわの加工食品の分野で高いシェアを誇っている企業が、島根県出雲市にある。

出雲大社の大鳥居から、瓦屋根の和風木造建築の旧大社駅を過ぎると門前町の一角に数棟の工場が立ち並ぶ。その傍らに立つ本社で、企業家が迎えてくれた。アルファア食品株式会社代表取締役の篠原隆氏だ。

## 学校給食に導入された アルファ化米

一九六六（昭和四十二）年設立の同社は、大社松精油協同組合の食品製造部門を前身とする。タイヤの軟化剤に使用する松根油を製造する同組合は、商社を通じて非常食用にアルファ化米の商品開発を行うことになった。

アルファ化とは、食べても消化されにくいβデンプン構造の生米を、速やかに消化されるαデンプンに変える技術だ。炊飯した米は水分が多く腐りやすいのに対し、アルファ化米は同じデンプン構造を持ちながらも乾燥しているため腐りにくい。洗米、つけ置きが不要で、長期保存が可能なのから、保存食として使われてきた。

昭和四十年代以降、米余りが問題となっていた日本国内で、アルファ化米の注目度が高まっていく。米を学校給食で使おうという機運が高まっていたものの、当時の給食はパン食が主流で、給食の供給元の多くは炊飯設備を導入していなかった。炊飯設備で炊かなくてもオーブンによる加熱で調理できるアルファ化米を作れないかと同社に声がかかったのである。

アルファ化米は、一度炊飯した米を急速乾燥させているため、熱や水分を加えると簡単に元に戻る。パンを焼く調理設備でも使えるように研究開発を進め、一九七二（昭和四十六）年に、特殊法人日本学校給食会とアルファ化米の加工委託契約を締結し、学校給食への供給を始めた。

## スーパーマーケットの急成長で 売上を伸ばした業務用商品

学校給食への供給を開始後、このアルファ化技術を他の分野でも活用でき

ないかと同社は模索した。目を付けたのは、急成長を遂げていた食品スーパーマーケットだった。当時、店舗で売られる「総菜」だ。店舗で販売する総菜は、どの従業員がいつ作っても同じような味になることが求められる。同社では、簡単にすぐ作れる業務用の赤飯や山菜おこわを開発し、各スーパーマーケットに売り込んでいった。

篠原社長が入社したのは、ちょうどその頃だった。明治大学農学部で食品加工を学んでいた篠原社長は「これからはお米を加工する会社が良い」と先輩から聞き、縁あって同社の採用面接を受けた。

「面接を受けたその場で『採用！』と。『うちは今忙しくて人手が足りないよ』と言われました。そんな言葉をかけられるくらい、まだ小さな会社でした」と篠原社長は振り返る。

これまで総菜コーナーでは白米を時間をかけて調理したものしか売っていなかった各スーパーマーケットは、アルファア食品の赤飯や山菜おこわを知るなり、すぐに取引を始めた。

「競合会社も少なかったのでどんどん売れていきました。入社したときからずっと営業職だったので、商談で売れてい



本社外観



米飯工場内部  
写真提供：アルファア食品株式会社

profile

篠原 隆(しのはら・たかし)

1958年生まれ。東京都出身。明治大学農学部卒業後、1980年アルファア食品株式会社入社。営業担当として東京・大阪で勤務し、2017年に代表取締役役に就任。同社の従業員数は240名、売上高49億円。

文：城市 奈那 写真撮影：古川 誠（島根県出雲市在住）



安全・安心でおいしく、簡便な食品を追求する研究開発部  
写真提供：アルファー食品株式会社



全商品をアレルギー対応商品にリニューアルした備蓄用シリーズ「安心米」  
写真提供：アルファー食品株式会社



家庭用商品「出雲のおもてなし」シリーズ。洗米もつけ置きも不要で、炊飯器で炊くだけですぐに食べられる  
写真提供：アルファー食品株式会社

くことがとても楽しかったのを覚えて  
います」

商品の認知度が上がるのに伴い、「もっと早く簡単に作れるものはないか」とお客さま側の要望のハードルも上がっていった。それに合わせて、同社も商品開発に力を入れ、業務用商品は炊飯器で炊くタイプから、短時間で大量に作れる蒸し器を使うタイプのアルファ化米に主軸が移っていく。竹の子おこわや松茸おこわなど、季節に合わせた商品も次々に打ち出した。さらに、お弁当に使ってもらうにはどうするか、売れるためにはどう工夫すべきかと、売り場の状況を踏まえた提案も行っていった。

### 成功と失敗を繰り返しながら おいしさを追求する

同社は業務用の商品にとどまらず、家庭用の商品、災害用の非常食へと、ラインアップを増やしていった。

アルファ化米が災害用非常食の主食として認知されたきっかけは、一九九五（平成七）年の阪神・淡路大震災だ。それまでの非常食の中心は乾パンだったが、被災地では「おいしくない」と評判が芳しくなかった。その後「主食は米がいい」という声の高まりもあって、アルファ化米を備蓄用食品にする自治

中で、これまでの事業の多角化が同社の強みになっていると篠原社長は話す。

### 伝統食を後世に伝えるため 「お赤飯の日」を制定

二〇一三（平成二十五）年に、「和食…日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録され、海、山、里の自然や豊かな四季、地域の風土や習わしとも密接に関わる和食の価値を改めて見直そうという機運が高まっている。

祝い事や季節の節目で食されるお赤飯は、日本の食文化における代表的な伝統食の一つだが、核家族化や食生活の変化によって食べる機会が減り、その由来や食べる意味を知らない世代が増えてきている。そうした中、篠原

社長は、日本の貴重な食文化を後世にも伝えていこうと、二〇一〇（平成二十二）年に赤飯文化啓発協会を設立した。さらに、「お赤飯の日」の制定を目指す委員会の発起人として活動を展開し、同年、勤労感謝の日の十一月二十三日が「お赤飯の日」として制定された。現在も、米や大豆の生産者、学校給食、コンビニエンスストア、和菓子店などさまざまな関係者の

体が増えていった。

こうした中、味の質は年々高まり続けていくと篠原社長は話す。「登山をされる方は、昔からよくアルファ化米を山に持っていかれるのですが、登山が趣味のご年配の方に商談でお会いすると『アルファ化米っておいしくないんだよね』と必ず言われていました。でも次第に『想像していた味と全然違う』と言ってもらえるようになりました」

そのおいしさを支えているのが、同社の研究開発部だ。米に関する基礎研究から付加価値の高い加工米飯や具材の開発、その量産化やパッケージ設計、表示作成までを担う。三十年以上にわたる東京農業大学へ社員を派遣し、米の食味などに関する共同研究を行ってきた。

### 非常食の全商品を 食物アレルギー対応商品に

同社が取り扱う家庭用商品や備蓄用商品の中には、現場の声から生まれた商品も多い。アレルギー対応商品もその一つだ。梅がゆやきのご飯、山菜おこわなどのラインアップがある備蓄用シリーズ「安心米」は、えび、かに、小麦、卵などの特定原材料等（アレルギー物質）二十七品目を使用していな

協力を得ながら啓発活動を進め、認知度の向上に努めている。十一月二十三日は、全国の神社で五穀豊穡を願う「新嘗祭」が行われる日で、その時に献上される赤飯や穀物がお赤飯の起源であることが由来になっている。

「食品を製造する企業として、私たちは、祝いの気持ちや感謝の心が込められたお赤飯をはじめとする日本の食文化を、後世にも伝えていく社会的使命があると思っています」

### 企業理念や行動指針を 従業員に浸透させる

入社からずっと営業一筋で歩んできた篠原社長は、二〇一七（平成二十九）年に代表取締役役に就任した。就任後から注力しているのが、働きやすい職場づくりである。同社では、従業員が五人以上のグループで週二〜三回、十五分の短いミーティングを重ねる取り組みを行っている。ミーティングに役員も加わり、一緒に話すものから休みの過ごし方まで幅広く、フリートークのときもある。誰でも自由に話せる時間を設けることで、日常的に意見を伝えやすい環境をつくるのが目的だ。

い。既存の商品もアレルギー対応を現在進めている。

「東日本大震災の前から、備蓄食料品の約一割をアレルギー対応食品にしている自治体はありました。しかし、実際に災害が起こると、アレルギーを持つ人がどこにいても分からなくなるので、届けられなかったようです。それならば、全商品をアレルギー対応にした方がいいのではないかと考え、非常食の全商品をアレルギー対応商品に切り替えることにしました」

アレルギー対応商品でも風味はほとんど変わらないという。五十年以上、米の加工に特化してきた企業だからこそ持つノウハウや技術がその裏にはある。「誰でもおいしく食べられる商品を作ることにはこだわってまいりますね」創業時に比べ、アルファ化米を製造する企業は増えてきたが、アルファ化米はこれまで「非常食」として認知される傾向があったため、製造企業も多くは非常食の製造販売に特化している。

一方、同社では、学校給食のほか、スーパーマーケットなどの量販店や一般家庭向けの商品も開発し、販売チャネル（流通経路）も増やしてきた。「お赤飯やおこわを作っている会社」として同社を捉えている一般の人も多い。非常食への注目が高まり、競争が激化する

また、この数年は「インターナルブランディング」に取り組んできた。設立から五十年以上が経ち、世代交代が進む中で、会社の経営理念や行動指針を若い社員にも浸透させる取り組みが重要性を増している。

「当社の五つの行動指針のうち、一番好きな指針はどれか」「豊かな自己表現とは、自分にとってどんなことなのか」などと、若い社員と話し合ったりします。強制的に覚えてもらうよりも、自分で調べて理解する方が浸透していきますね」

市場の深掘りや経営基盤の安定化を自身の役目と捉えると同時に、より風通しの良い会社をつくることも経営者の大切な仕事だと考えている。「私のモットーは『仕事は楽しく』。従業員に『仕事楽しい』と思ってもらえるような環境をつくってまいります」



アルファ化米を使った赤飯。常温保存で賞味期限は1年間。祝い事の日だけでなく、普段の食事に使う人も多い 写真提供：アルファー食品株式会社

# 地元の木を使い切り、林業振興と地域活性化を目指す株式会社オロチ

《鳥取県日南町》

地元の豊かな森林資源を活用して、林業の振興と地域活性化を目指している株式会社オロチ。日南町産のスギやヒノキなどを余すことなく使ってLVL(単板積層材)を製造販売するメーカーとして、日南町だけでなく日本の森林と林業の未来を切り拓いている。

## ■地元森林所有者が出資

八岐大蛇伝説が残る鳥取県日南町は、中国山地のほぼ中央部、島根・岡山・広島との三県に接し、面積は三百四十km<sup>2</sup>に及ぶ。その九割は森林で占められ、森林面積の六割にあたる一万八千二百haは民有人工林で、スギ九千五百ha、ヒノキ五千haとなっている。それらは植林後三十〜六十年が経過し、伐採期を迎えている。だが、外国産材に押されて国産材の需要が振るわない状況が続く中で、その活用が課題となっていた。そこで、日南町は二〇〇五(平成十七)年に地域再生計画「地球環境にやさしい新森林業の形成」を策定して国の認定を受け、森林資源の活用に乗出した。その計画推進の中心となったのが、翌年一月に設立された木材生産会社の株式会社オロチである。

す。短工期で完成する高断熱・高気密の住宅が求められるようになる中で、それを可能にするLVLに着目しました」と森社長。

スギ・ヒノキ以外の外国産材を使ったLVLは国内でも製造されていたが、スギとヒノキのLVLは例がなく挑戦的な取り組みとなった。それでも踏み切ったのは、丸太を桂剥きにする装置(ロータリーレス)の国内トップメーカー・株式会社名南製作所(愛知県大府市)の創業社長が日南町出身で、製造技術も含めて相談できたこと、LVLが他の集材材や合板に比べて丸太から製造する上での歩留まりがよかったことが決め手になったという。「桂剥きにするので少し曲がった木でも使え、無駄になる部分も比較的少ない。山の木を使い切りたいという森林所有者の思いにかなう製品でした」

## ■スギの弱みを克服する

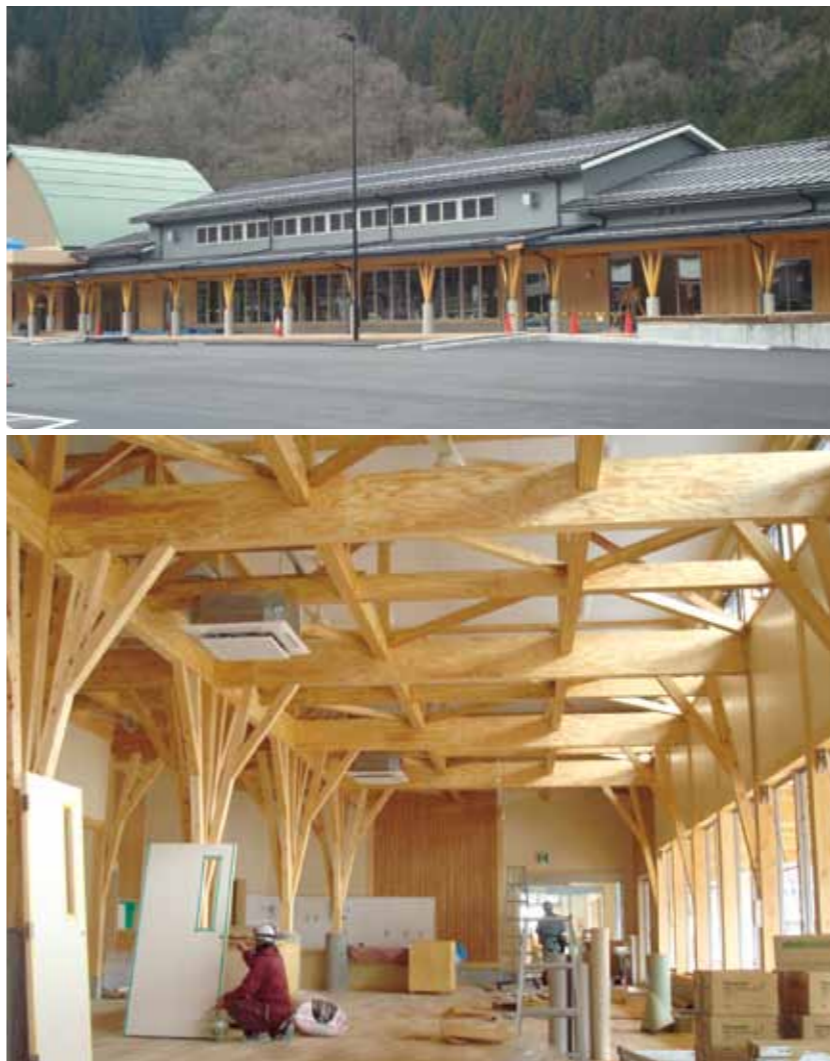
しかし、スギのLVL化は簡単ではなかった。予想もしていなかった歪みや反りが生じたのだ。出荷を中止し、原因を徹底的に調べた。「品質試験を繰り返す中で、スギにはさまざまな品種があり、個性の強い品種が混じると安定しないこと、乾燥させ過ぎると逆に大気中の水分を吸っ

工場を建設して二〇〇八(平成二十)年四月から生産を開始した。スギのLVL化に挑む

LVLとは、丸太を大根の桂剥きのように薄く剥いて厚さ三〜四mmの単板にし、それを木材の繊維方向に揃えて何枚も貼り合わせて作る単板積層材のことである。繊維方向が揃っていることで、無垢の木材と同等か、それ以上の

安定した強度が得られるのが特徴だ。強度ごとに選別した単板を貼り合わせて製造することにより、用途に応じた強度とサイズの製品化が可能である。また、熱で乾燥させた単板で作られたLVLは、内部がよく乾燥しているので無垢の木材のような歪みや反りなどが生じにくいという利点があった。

「特にスギは柔らかく、十分乾燥しないで使うと歪んで隙間が生じたりしま



オロチのLVLが使われた「道の駅にちなみ日野川の郷」写真提供：株式会社オロチ



集積されたスギの原木



ロータリーレスで厚さ3〜4mmになった単板



森英樹社長



本社事務所

て伸縮することなどが分かりました。それを調整し克服するのに三年くらい費やしました。天然資源相手の難しさを思い知らされました」と森社長は話す。

品質面だけでなく、外国産材に打ち勝つ価格競争力も求められた。その点は、木を伐り出す山に近い優位性と加工コストの低減、株主である森林所有者の理解などによって価格を極力抑えた。木材目給率を五十%以上に高めるという国の目標も追い風となり、品質に優れ、価格でも劣らないオロチのLVLは大手のハウスメーカーや工務店などから高く評価され、住宅市場へ浸透していった。

## ■一本の丸太を使い切る

オロチは現在、スギやヒノキを使っさまざまな強度や用途のLVLを生産。最大九mの長尺サイズも製造し、寸法指定の注文にも応じている。

日南町の森林からスギやヒノキを伐り出し、丸太へと加工する過程は日南町森林組合と日南町木材生産事業協同組合が行い、オロチ創業当時年間三万m<sup>3</sup>だった丸太への加工量は十萬m<sup>3</sup>まで拡大した。オロチはその半分近くを使

用し、二万四千m<sup>3</sup>の製品を出荷している。一本の丸太の五十五%以上は製品となり、残りの端材や木くずなどは、木の乾燥の熱源や工場内の電力の発電源となるボイラーの燃料として有効活用している。

環境に配慮した事業展開にも努め、日南町が進めるFSC<sup>®</sup>認証取得に合わせ、二〇一一(平成二十三)年七月に加工・流通過程で非認証品が混入しないよう管理されていることを示すCoC<sup>®</sup>認証を取得し、FSC認証材100%のLVLを製造・販売している。

従業員は現在七十五人で、定住促進の弾みとなる雇用を創出した効果も見逃せない。だが皮肉なことに、ここ数年、人手不足が深刻化している。「三交代制で操業し夜勤があるため、

若い世代から敬遠されがちです。夜勤がないことが理想なので、将来的にはAIやロボットを活用した省人化・無人化を進める必要もあると思います」製品に関しては、性能と付加価値を高めることが継続的な課題だという。

「当社のLVLは、住宅だけでなく集合住宅や商業施設にも使われていますが、例えば不燃性を高めれば、使用先は公共施設などへも広がります」と森社長。新たな森林業の確立へ向け、LVLの次の可能性を見据えている。

※1 LVL... Laminated Veneer Lumber 単板を繊維方向を揃えて積層・接着した木質材料  
※2 FSC認証... 適切に管理された森林で持続的な形で生産されている木材に与えられる国際的な認証  
※3 CoC認証... Chain of Custody. 木材への加工製造から消費者に届くまでの全過程でFSC認証原料が使われていることを示す認証

# 子どもたちが明日に希望を持てる社会の実現を目指す 「こども明日花プロジェクト」のリーダー 児玉頼幸さん

県庁職員として子どもの貧困問題に直面し、貧困の連鎖を痛感。子どもたちが安心して過ごせる居場所をつくり、学びと食事の環境を提供するプロジェクトを立ち上げた。支援の輪を広げるため、地域のヒト・モノ・カネを結ぶ仕組みづくりを進めている。



profile

児玉 頼幸(こだま・よりゆき)

NPO法人山口せわきネットワーク代表

1960年山口県美東町(現・美祿市)生まれ。山口大学卒業後、山口県庁に就職。主に福祉分野を担当し、児童虐待や子育て支援などに携わる。2008年、NPO法人山口せわきネットワーク代表に就任。2016年に「こども明日花プロジェクト」を発足させ、活動をリードしている。2019年4月より山口県福祉総合相談支援センター所属。

文：村上 郁子(山口県岩国市在住) 写真撮影：マキタオモリツグ(山口県萩市在住)

## 貧困の連鎖を断ち切る

JR山口線・湯田温泉駅から徒歩数分の住宅街に「なのはなハウス」と手書きした表札が貼られた家がある。一見、普通の民家だが、ここは地域の子どもたちの学習支援・食事支援・居場所づくりなどを行う「こども明日花プロジェクト」の活動拠点。事務局として、また毎週土曜日に地域の子どもたちを迎えて学習支援や居場所づくりを行う現場の一つとしても活用されている。

こども明日花プロジェクトを運営するのはNPO法人山口せわきネットワーク。代表を務めているのが山口県庁職員でもある児玉頼幸さんだ。

山口せわきネットワークは、二〇〇三(平成十五)年の発足以来、市内中心商店街に開設された山口市市民活動支

## ファンドレイジングで資金を調達

援センター「さぼらんで」や高齢者らの交流施設「まちのえき」の運営を担ってきたが、二〇一六(平成二十八)年、新たにこども明日花プロジェクトを立ち上げた。県職員として長年、児童福祉や高齢者福祉に携わり、近年深刻化している児童虐待や子どもの非行の実態を目的にしたりしてきた児玉さんは活動の動機をこう語る。

プロジェクト始動の発端となったの



子どもや子育てに関する活動を行ってきたメンバーと2016年にこども明日花プロジェクトを発足  
写真提供：こども明日花プロジェクト



子どもたちの学習や食事支援、居場所づくりの拠点となる「なのはなハウス」

「虐待や非行の根底には、子どもに手をかけてやれない家庭の困難な状況があります。次の世代へと連鎖してしまわないよう、そうした子どもやお母さんたちを、地域のつながりの中で支援していきたいと考えたのです」

「虐待や非行の根底には、子どもに手をかけてやれない家庭の困難な状況があります。次の世代へと連鎖してしまわないよう、そうした子どもやお母さんたちを、地域のつながりの中で支援していきたいと考えたのです」

活動を始めるにあたり、児玉さんが特に抱いていた思いは、子どもたちに「ご飯を食べさせたい」「勉強させたい」という二点だった。それらの課題に対応しつつ、「どんな環境に生まれ育っても、子どもたちが明日に希望を持てる社会の実現」を目指して、二〇一六年五月にこども明日花プロジェクトを発足させ、同年七月から事業をスタートした。

## 生活支援を兼ねた学びの場

学習支援や生活支援、居場所づくり

は、二〇一五(平成二十七)年六月に山口市で開催された「子どもの貧困問題」についての意見交換会だった。子どもや子育てに関わるNPO活動などに携わってきたメンバー約十名が意見を交わし、情報収集や対策案の検討を重ねた結果、行動を起こすには組織の設立が必要だと判断。設立には、人材と活動資金が必要なため、ボランティアの確保とファンドレイジングによる資金調達を決めた。ファンドレイジングは行政からの補助金に頼らず、独自に寄付などを集めて問題解決資金に充てる手法だ。「新たな活動への予算を役所から確保するのは難しい」という現状認識から児玉さんはこの方法を導入した。

「市内の一カ所では始めて、半年後に二カ所、一年後にさらに二カ所増設して市内五カ所となり、登録中学生は合計約六十名に。二〇一八年度の中学三年生は三十名全員が高校へ進学しました」と、児玉さんは笑顔で語る。学習補助は大学生、調理は地域のボランティアが担当し、資金は当初、クラウドファンディングで調達した。

一方、主にひとり親世帯の子どもにもう一つの実家のような場所を提供する「居場所づくり」も県の委託事業として同時期にスタートさせた。こちらは土曜日の午後、活動拠点を訪れた子どもたちがボランティアと一緒に過ごし、夕食を食べてから帰宅するというもの。りんご狩り、餅つき大会など季節の体験行事も開催し、子どもだけで



この名酒にこの一品 19 広島県三原市 酔心 氷わり原酒 タコの天ぷら



酔心山根本店

創業 1860(万延元)年  
 広島県三原市東町1丁目5-58  
 TEL 0848-62-3251  
<http://www.suishinsake.co.jp/>



展示スペース

古くから「吉備の酒」と歌に詠まれた酒の醸造地であり、最盛期には十数軒の酒蔵が立ち並んでいたという広島県三原市。今では旧山陽道沿いに本店を構える、一八六〇(万延元)年創業の酔心山根本店だけが、その伝統を守り続けている。社名は、明治時代に二十近くあった銘柄を「酔心」に統一したこと由来する。大正時代に全国酒類品評会で三年連続優等賞を受賞するなど、早くから広島を代表する酒として全国にその名を知られてきた。昭和に入ると、日本画の巨匠横山大観が、「飲み飽きのしない酒」と、終生愛飲したという逸話でも知られた。その後「酔心」と読み方を変え、今日に至っている。

酔心のお酒の特徴は、こだわりの軟水を使ってじっくり発酵した、辛口ながら甘露の味わいにある。二〇〇〇(平成十二年)には山根秀朋会長(当時社長)と山根雄一社長が、究極の軟水を求めて、東広島市の鷹ノ巣山で超軟水を掘り当てるなど、飽くなきこだわりで「飲み飽きのしない酒」を醸し続けてきた。今回紹介する名酒は、青いボトルが涼感を誘う四月〜八月ごろの季節限定



子どもと大人がみんなで楽しく食事をする場「大内みんな元気食堂」  
 写真提供: こども明日花プロジェクト



土曜日の夕食を準備するボランティアの方たち。食材は近隣のスーパーなどから無償提供されている

なく親の参加も歓迎している。「親のストレスが子に向かつて虐待を招くこともあるので、親を孤立させないことを常に意識しています」

資金を集めるにあたり、県や市、教育委員会に事業の意義を広く説明し、予算を確保した。

「学生や調理ボランティアの確保は、長年NPO活動をしてきたスタッフの幅広いネットワークのおかげです」

自身も含めた適材適所の役割分担が当初から順調に進んでいるのは、児玉さんのプロデュース力の証しだ。三十代の頃、国際交流課所属時に中国へ留

学し、その後中国映画の上映会を立ち上げた。十年間続けた経験が事業を推進する力やネットワーク作りに生かされている。

「誰もやらなければ自分がやればいい」と児玉さんは話す。常に新しい課題を見つけ出し、周囲をリードしながら解決策を模索してきた。

学習会の余得という形で始めた食事の提供は「子ども食堂」にも発展した。二〇一八年度には山口市ふるさと納税とクラウドファンディングで集めた資金により、市内三地域で計十回子ども食堂を開催した。

子ども食堂は、子ども一人でも安心して訪ねることのできる無料または低額の食堂である。貧困家庭の子どもたちも利用できる

ため、この数年で全国各地に広がっている。こども明日花プロジェクトでは、子どもの孤食を防ぐだけでなく、一人暮らしの高齢者や地域

で孤立しがちな母親たちの交流の場にもなる「地域食堂」として運営してきた。

「地域食堂は誰でも安心して参加でき、地域の人と知り合い、一緒にごはんを食べる場です。地域が子どもと親を見守り・支えるきっかけづくりをしたいと考えています」

誰かと話し、一緒に食べ、役立つ働きをする。地域食堂は少子高齢化が進む地域の人々のニーズに見事に応えた取り組みといえよう。さらに今後は、朝食抜きで登校する子どもへの朝ごはんの提供についても検討していく予定だ。

啓発活動と二枚目の名刺

多くの人に子どもの貧困問題に関心を持ってもらい、支援の輪を広げていこうと、児玉さんは県内各地で講演やセミナーなどを重ねている。

「子ども食堂に関心はあるけれど、行動に移せない」という人たちにノウハウを伝えて、その方々が活動を始めてくれれば、もっと多くの子どもたちが救われることになりました」

介護医療における地域包括支援のよ

玉さんはそのコーディネーター役を果たしたいと考えている。

「地域のヒト・モノ・カネを結びつける仕組みづくりがわれわれの使命。『してあげる』ではなく『させていただく』という姿勢を肝に銘じています」

県庁職員として勤務する傍ら、有給休暇のほとんどを活動に費やしている。現状にも、やりがいと喜びを感じている。

「近年『二枚目の名刺』とよく耳にしますが、役所の職員が公益事業で副業・兼業をすれば、現場体験が積めて、官民連携も円滑に進み、職務上も有益です。官民双方の特徴を生かし合うために副業・兼業がもっと広がればいいですね」

プロジェクトの抱負を訪ねると、世代を超えて夢を紡ぎ続ける言葉が返ってきた。

「参加した子どもたちが成長後にここでの経験を思い出し、今度は次世代で支援する立場になってくれたらと思っています」

村上 郁子(むらかみいুক)

山口県生まれ。フリーライター。大学卒業後、大学研究室勤務を経て、各種雑誌や自治体・企業の広報・情報誌、記念出版物などの取材・執筆・編集に携わる。

# 重森三玲

[1896-1975]



重森三玲

景観コンサルタント。この計画で設計者としても信頼を得た結果、同寺の本坊、方丈に代表作となる庭を造ることになる。

## 古庭園で学んだ美と技が結実した東福寺本坊庭園

東福寺には方丈の周りに四つの庭が設計された。枯山水の南庭、北斗七星を表す東庭、井田市松の西庭、小市松の北庭。これらの庭の作庭には各地の古庭園で学びとった美と技が結実している。

最初に取り組んだのは南庭の枯山水だった。この庭は方丈前にある。方丈とは本坊内の最も重要なお堂であり、儀式の場。その南庭は周辺の外部空間の中で最も重要な庭に位置づけられる。三玲は格式ある南庭に巨石を組み上げた枯山水庭園を提案する。脳裏には龍安寺の庭を意識しながらも、それを超えるような現代庭園の創作を想い描いた。南庭は不老不死の仙人が住むという蓬萊神仙の島々を表し、庭の東部に三本の巨石を横に配しながら、その周辺に力強い立石を組む大胆な構成。中央から西部は、敷地を対角線で区切った苔地とし、格式の高い禅寺の五山を表す築山をデザインした。

市松の庭は北庭。かつて南庭の中を垣間見ることができ。七十九年の生涯において、京都の松尾大社庭園（一九七五年作）が遺作になった。観光名所である嵐山の近くにあり、東福寺の庭は洛東に、こちらは洛西の名園である。

（文・重森三明）

## 茶の湯や生け花に関心をよせた青年時代

重森三玲は東福寺本坊庭園（一九三九年作・国指定名勝）の「市松の庭」など、多くのモダンな枯山水を作庭した造園家である。珍しい名前は、フランスの画家、ジャン・フランソワ・ミレーに因んでいる。一八九六（明治二十九年）岡山県の旧賀陽町（現・吉備中央町）で生まれた。三玲の名は二十代後半に本人が戸籍上から改名したもので、元の名は計夫（しげお）といった。実家は小地主の農家だった。普通ならば長子として農家を継ぐはずの三玲は、年少より絵を描くことが好きで、青年時代から茶の湯や生け花に関心をよせた。十八歳の時、すでに茶室を設計している。その後、画家になることを夢見て二十一歳で上京し、私立美術学校の先駆けだった日本美術学校に入学する。田舎から大都会への大冒険、一大決心だった。

東京では新しい知識を得て、技術、感性を磨いた。しかし、画家としての三玲は挫折の連続だった。彼は日本画の技法で最先端の抽象前衛絵画を描こうとした。当時、この試みは少し早すぎたようで、彼の絵はあまり評価されなかった。伝統と革新の狭間で生きることを選り、西洋美術の流行に敏感でありながら、日本の伝統芸術を重要視した。この考えは生涯を通して続いていく。やがて、青年時代から続いていた茶と花の研究を進めつつ、そこに「庭」が加わり、日本の美の特質を探究した。

## 京都で庭園の研究を深める

関東大震災を契機に東京を後にした三玲は岡山に戻り、約五年、郷里で暮らした。この間、自宅に処女作の庭園を造っている。京都には一九二九（昭和四年）から定住。当初は日本美術の研究を深めるため、数年の滞在予定

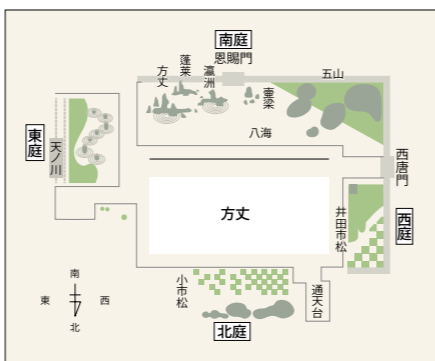
## 京都に残る三玲の名作たち

東福寺の作庭から数年後、三玲は吉田神社の神官の屋敷であった家を譲り受ける。江戸中期の建物はそのまま保

存し、別に自ら枯山水庭園や市松の襖が目を引く茶室を設計した。現在、三玲旧邸の一部は重森三玲庭園美術館として予約制で公開している。小さな施設だが、芸術家としての三玲の美意識



本坊庭園 枯山水の南庭 蓬萊神仙の島々 写真提供：東福寺



東福寺本坊庭園見取り図



本坊庭園 小市松の北庭 写真提供：東福寺



重森三玲旧邸。茶室「好刻庵」から見た庭園 写真提供：重森三玲庭園美術館



好刻庵の襖は波濤の市松模様。釘隠し、欄間、障子の腰の意匠まで三玲が創作 写真提供：重森三玲庭園美術館



遺作の松尾大社庭園 上古の庭 写真提供：重森三玲庭園美術館

## 重森 三明（しげもり・みつあき）

京都市生まれ。京都芸術短期大学専攻科修了。パリ国立高等美術学校卒業。2006年、重森三玲旧邸の書院庭園部を重森三玲庭園美術館として再生、館長に就任。もともとは現代アートを制作、研究。近年、「場のアート」として茶、花、庭等、伝統芸術にも関心をよせるとともに、数年来、庭園の設計にも徐々に取り組み、現代庭園の創作を模索する。著書・写真集に『重森三玲 II』（京都通信社）。

# 浦富海岸島めぐり遊覧船

《鳥取県岩美町》

北西の季節風と波浪によって浸食した複雑な地形を持つ浦富海岸。点在する離れ岩の間を縫うように進む浦富海岸島めぐり遊覧船は、ダイナミックな地形が間近で楽しめる航路だ。



沖縄の万座ビーチと同程度の透明度の高さを誇る鴨ヶ磯海岸

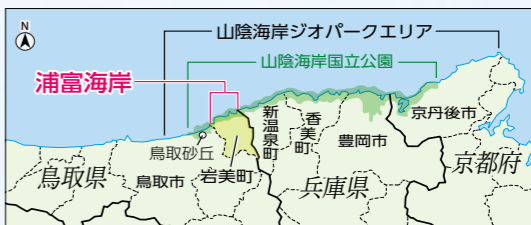
## 世界ジオパークに認定

京都府京丹後市の経ヶ岬から鳥取市青谷までの山陰海岸国立公園を中心とした東西約百二十キロメートルのエリアは、山陰海岸ジオパークと呼ばれ、二〇一〇(平成二十二)年に、世界ジオパークとしてユネスコから認定を受けた。この山陰海岸ジオパークの一角をなす浦富海岸は、鳥取県岩美町の東西約十五キロメートルの海岸部を指す。

ジオパークは四年に一度再認定審査が行われるため、京都府、兵庫県、鳥取県の三府県や岩美町、鳥取市などの関係市町で構成する山陰海岸ジオパーク推進協議会は、認定が取り消しにならないよう、連携してガイドの育成や情報発信などに力を入れている。

## 北西の季節風と波浪により浸食した海食地形

浦富海岸に見られる海食地形は、この海岸部に分布する硬い花崗岩と厳しい気象条件が相まって、形成されたものだ。



島めぐり遊覧船のりば

日本海側に吹く北西の季節風と海岸に押し寄せる強い波浪によって、花崗岩は北西から南東方向に発達した規則正しい節理を持つ。この割れ目が浸食を受けやすいため、海食洞ができる。そして、その海食洞が貫通して洞門になり、洞門の頂上部が落ちて離れ岩ができる。

少し離れた所から海岸の崖や島を眺めると、北西から南東方向に筋が入ったような節理をはっきりと見ることができる。自然の面白さを感じられる光景だ。

## 洞門や洞窟、透明な入り江にも入り込む小型船

網代港から出航する島めぐり遊覧船は、そんな山陰海岸ジオパークのダイナミックな景観や地質学上貴重な地形を、間近に見られるクルーズラインである。「遊覧船」と「小型船」の二種類があり、天気がよく波が穏やかなら、両船とも約一時間ごとに出航する。

三月から十一月まで運航する定員九十五人の「遊覧船」の所要時間は約四十分。「小型船」よりも船の揺れが少ないため、ゆったりとクルージングが楽しめる。

四月二十五日から九月末まで運航する「小型船」は、定員十二人で、所要時間は約五十分。「遊覧船」では通れない狭い航路を通り、洞窟や水深の浅い入り江にも進入するため、間近でダ

イナミックな景観を楽しみなければ、小型船がおすすめだ。

網代港を出発した小型船が最初に通るのが「千貫松島」である。島の中央には奥行き二十メートルの洞門があり、頂上には一本の松が生えている。江戸時代、鳥取藩主の池田侯が船遊びをした際に「我が城の庭に、この岩付きの松を移した者に銀千貫を与えようぞ」と言ったことから、この名がついたとされる。景観を保つため、現在の二代目の松も、丁寧に管理されている。

次に通る「白粉の断崖」は、高さ七十メートルにもなる絶壁である。海鶴が集団営巣するため、岩壁に落ちた海鶴のフンの跡が白く光って見える。岩燕洞門、観音浦・西大島、鯛洞門、太郎兵衛島を通り抜けてたどり着くのが、浦富海岸で最も風光明媚なスポット

ト、「鴨ヶ磯海岸」である。庭園のように大小の島が点在した入り江で、沖縄の万座ビーチと同程度の海の透明度を誇り、その砂は天然記念物に指定されている。晴天で海が穏やかな日には、船の影が海底に映るほどだ。小型船はこの入り江の中を周遊し、乗客は覗きメガネで海中も観察できる。

駱駝島・石垣島を過ぎた後に見えるのは、「菜種島・菜種五島」である。コースの中でもひととき大きな島で、春には菜の花が咲き乱れる。昔、菜種を積んだ北前船がこの沖で難破し、積み荷の菜種が流れ着いて野生化したとの説がある。ジオパークは「地形・地質の生きた博物館」といわれる。浦富海岸島めぐり遊覧船は、二千万年前からの日本海形成の歴史が、身近に感じられる航路といえる。



島めぐり遊覧船の航路



洞窟に入る小型船。北西から南東へ発達した節理が間近に見られる



春には菜の花が咲く菜種島・菜種五島



海鶴のフンの跡が白く光る白粉の断崖



ゆったりとクルージングする遊覧船



千貫松島の狭い洞門を通る小型船

# 三徳山

《鳥取県》



地図制作：磯部 祥行



参道の往復には約2時間を要す



平安時代後期建築の投入堂



文殊堂からの眺め。廻り縁に腰掛けながら大山などが遠望できる

山岳仏教の霊山として古くから信仰されてきた三徳山は、七〇六（慶雲三）年に役行者が修験場として開山したのが始まりと伝えられる。八四九（嘉祥二）年には慈覚大師円仁が山麓に伽藍を造営し、阿弥陀、大日、釈迦の三仏を安置して三佛寺と号したとされる。

火成岩の一種の安山岩や集塊岩からなる三徳山は、浸食によって洞窟や奇岩、絶壁などの奇勝が形成され、特に山腹の勾配は急である。滑落が多いため、一人での参拝登山は禁止されており、入山の際は服装や靴のチェックを受けることになっている。

参道入口から階段を登り、参詣受付案内所を通って三佛寺本堂に向かうと、近くに入峰修行受付所がある。宿入橋を渡ってからはすぐに急斜面となり、時に木の根や鎖を伝って、岩山をよじ登っていく。参道の中ほど過ぎにある文殊堂は絶景スポットで、岩の上に建立された舞台造りの廻り縁から大山などが遠望できる。

地藏堂や納経堂を過ぎ、さらに登っていくと国宝・投入堂が視界に入ってくる。断崖絶壁の窪みに優美にたたずむ投入堂の姿は、唯一無二の光景として登山者の記憶に深く刻まれるだろう。



©「碧い風」VOL.96 2019年7月1日発行

発行人：清王 秀敏 編集人：城市 奈那  
 ●企画・発行：中国電力株式会社 地域共創本部  
 〒730-8701 広島市中区小町4-33 ☎082(544)2759  
 [ホームページ(碧い風)] <http://www.energia.co.jp/eneso/tech/wind/index.html>

●編集・制作：株式会社ジェイクリエイト  
 〒101-0052 千代田区神田小川町3-7-13 ヴァンサンクビル6F ☎03(6273)7135